
 学 会 記 事

第 49 回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成 14 年 6 月 8 日 (土)
午後 3 時 30 分～5 時 30 分
場 所 新潟東急イン 3 階 明石の間

一 般 演 題

1 大腸鋸歯状腺腫の E-cadherin 遺伝子異常の検討

馬場洋一郎・味岡 洋一・遠藤 泰志*
廣野 玄・向井 玄・渡辺 英伸
新潟大学第一病理学教室
国立がんセンター東病院病理*

【目的】大腸鋸歯状腺腫 (SA) は APC 遺伝子異常頻度が低く、通常の管状腺腫 (TA) と腫瘍化のメカニズムが異なる。今回、細胞内で APC 遺伝子異常に基づく腫瘍化と同様の変化を起こす可能性を持つと考えられる E-cadherin 異常の検討を行なった。

【対象・方法】内視鏡的に切除された SA33 病変, TA12 病変を対象に E-cadherin と APC 遺伝子において変異とプロモーター領域の methyl 化を検討した。

【結果】APC 遺伝子は変異・methyl 化に伴い TA に多く認められた (変異 SA : 3 %, TA63.6 %, methyl 化 SA : 15.2 %, TA : 75.0 % 共に $p < 0.001$)。E-cadherin 遺伝子は SA・TA ともに methyl 化が高頻度 (SA : 66.7 %, TA : 97 %) であった。

【考察】E-cadherin のプロモーター領域の methyl 化は SA・TA で高頻度に認められたが、このことが SA の発生に特異的かどうかについては結論は得られなかった。

2 成人発症の腸回転異常症の 1 例

高橋 聡・富山 武美・須田 武保*
豊栄病院外科
新潟大学第一外科*

今回、我々は成人発症の腸回転異常症を経験したので報告する。

症例は 50 歳男性。平成 11 年 11 月から心窩部痛、月に一度の嘔吐を認めていた。平成 12 年 6 月 14 日嘔吐頻回となり近医受診し、急性腎不全の診断で当院紹介受診した。腹部 CT で上腸間膜動・静脈の走行異常、上・下部消化管造影で大腸の左側偏位、小腸の右側偏位を認めた。十二指腸は Treitz 靭帯が欠如し、壁外性に圧排されていた。Nonrotation type の腸回転異常症の診断で 7 月 12 日手術施行した。腸回転異常症に小腸の軸捻転を合併していた。Ladd 靭帯を切離、捻転腸管の癒着を剥離し、虫垂切除術を施行した。第 8 病日に腸閉塞症状を認めたが禁食のみで軽快、以後経過は良好であった。成人の腸閉塞症の診察においても、腸回転異常症の関与を考慮する必要があると考えた。

3 自然脱落をきたした大腸粘膜下腫瘍の 1 例

塩路 和彦・富所 隆・金澤 雅人
佐藤 知巳・稲田 勢介・波田野 徹
吉川 明

厚生連長岡中央総合病院内科

症例は 61 歳の男性。発熱を主訴に近医を受診し、注腸にて横行結腸に腫瘍を認め当院紹介となった。CF では有茎性の粘膜下腫瘍を認めた。皮膚悪性腫瘍の既往があり、頸部リンパ節生検にて同病変に類似した組織像が得られたことより、大腸病変も皮膚腫瘍の転移と診断した。通過障害を来していたため手術予定であったが、患者より腫瘍が排出されたとの訴えあり。CF を再検したところ前回腫瘍の認められた部位には浅い潰瘍のみが認められた。脱落前の CF で茎部が螺旋状にねじれていたことより絞扼壊死を来し自然脱落したものと考えられた。大腸ポリープは蠕動や便による刺激により時に自然脱落を来することがあるが、粘